



Title	The rejection mechanism of rat pancreatico-duodenal allografts with a class I MHC disparity
Author(s)	山本, 重孝
Citation	大阪大学, 1994, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/39260
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	山 本 重 孝
博士の専攻分野の名称	博 士 (医 学)
学 位 記 番 号	第 1 1 4 9 6 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 6 年 6 月 30 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第2項該当
学 位 論 文 名	The rejection mechanism of rat pancreatico - duodenal allografts with a class I MHC disparity (脾移植における急性拒絶反応の免疫学的特異性に関する実験的研究 —クラスI MHC 抗原相違ラット脾移植モデルを用いた解析—)
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 松田 晴 (副査) 教 授 濱岡 利三 教 授 白倉 良太

論 文 内 容 の 要 旨

[背景ならびに目的]

脾単独移植の最近の臨床成績は、免疫抑制療法の進歩にもかかわらず1年生着率で約50%と不良であり、心、肝、腎などの他臓器に比し脾は拒絶されやすい臓器と考えてられている。脾が拒絶されやすい原因の一つとして、移植脾にはレシピエントの拒絶反応を惹起させる強い免疫原性があるのではないかと推察できるが、移植脾が急性拒絶反応において惹起する免疫応答の特異性については未だ明らかにされていない。最近我々は、クラスI MHC 抗原のみ異なる組み合せの中で、心、肝、腎は生着すると報告されている PVG-R1 ラットから PVG ラットへの組合せ、いわゆる “Low responder” の系において、脾は拒絶されるという事実を確認した。そこで本研究は、この組合せにおいて移植脾が拒絶される過程でレシピエントに誘導される免疫応答を細胞性ならびに液性免疫の面より、拒絶されない移植心に対する免疫応答と対比することにより、移植脾の急性拒絶反応における免疫学的特異性を明らかにすることを目的とした。

[対象ならびに方法]

移植実験には、ドナーに PVG-R1 ラット (RT1. A^bB^cD^cC^b)、レシピエントに PVG ラット (RT1. A^cB^bD^cC^b) を用い、Sun Lee 法による脾十二指腸移植モデルと Ono-Lindsey 法による腹部異所性心移植モデルを用いた。前者のレシピエントは移植前にストレプトゾトシンを投与することにより糖尿病とし、脾移植後血糖値が 200mg/dl 以上に再上昇した日を拒絶日と判定した。移植脾および十二指腸は移植脾が拒絶された時点で、移植心は移植脾の拒絶日と同日に組織学的検討を行った。細胞性免疫応答には、レシピエント浮遊脾細胞を rabbit 抗 rat IgG 抗体で coating した Degalanbeads column に通過させて分離した Ig⁻ 細胞を T 細胞として用いた。さらに CD4⁺ T 細胞および CD8⁺ T 細胞は Magnetic beads を用いて分離した。この分離細胞を用いてリンパ球混合培養試験、さらに、限界希釈法を用いたドナー抗原に特異的な IL-2 産生ヘルパー T 前駆細胞頻度 f (Thp) ならびに細胞傷害性 T 前駆細胞頻度 f (Tcp) を測定した。液性免疫応答としてレシピエントの血清を用い、ドナー由来の標的細胞に対する補体依存性細胞傷害活性を ⁵¹Cr release 法にて測定した。抗体のサブクラスは flow cytometry 法にて測定した。さらに、これらの抗体の結合部位がドナーのクラスI MHC 抗原であるか否か検討するため、ラットクラスI MHC 抗原を認識するモノクローナ

ル抗体 OX18 を用いて、レシピエント血清による OX18 の結合阻害を flow cytometry 法にて測定した。

[成 績]

- (1) 移植成績ならびに組織所見：移植脾は平均 21.4 ± 1.8 日 ($n = 5$) で拒否されたが、移植心は 100 日以上生着した ($n = 5$)。脾拒絶時には、移植脾の内分泌組織は完全に線維組織に置き換わっていた。移植心の組織構築は保たれていた。
- (2) リンパ球混合培養試験：脾拒絶後のレシピエント脾 T 細胞、主として CD4⁺ T 細胞、がドナー抗原に対し増殖応答を示したが、心移植後の脾 T 細胞は増殖応答を示さなかった。
- (3) 限界希釈法：脾拒絶後、 f (Thp) は $1/(5,030 \pm 3,396)$ ($n = 4$) であり、心移植後の $1/(17,326 \pm 6,822)$ ($n = 4$) および移植前の $1/(40,609 \pm 15,441)$ ($n = 5$) に比して有意にクローニングの拡大を認めた (各々 $p < 0.05$ および $p < 0.01$)。一方、脾拒絶後、 f (Tcp) は $1/(1,848 \pm 330)$ ($n = 4$) であり、心移植後の $1/(2,215 \pm 2,131)$ ($n = 4$) および移植前の $1/(2,476 \pm 585)$ ($n = 5$) に比し有意な拡大を認めなかった。
- (4) 補体依存性細胞傷害活性：脾拒絶後、心移植後ならびに移植前血清のドナー由来標的細胞に対する % lysis は、血清希釈率 (1 : 4, 1 : 8) において各々 ($51.7 \pm 20.2\%$, $34.9 \pm 19.8\%$), ($2.5 \pm 3.8\%$, $3.4 \pm 4.9\%$), ($1.0 \pm 1.1\%$, $2.1 \pm 2.3\%$) であり、脾拒絶後にのみ細胞傷害性抗体が検出された。
- (5) flow cytometry 法：心移植後血清中にはドナー由来の標的細胞に結合する抗体の存在を認めなかつたが、脾移植後の血清中には標的細胞に結合する抗体を認めた。
- (6) ドナークラス I MHC 抗原に対する blocking flow cytometry 法：脾拒絶後のレシピエント血清で予め incubate した標的細胞には、移植前血清で incubate した標的細胞に比して、抗クラス I MHC 抗体 (OX18) の結合が抑制された。

[総 括]

- (1) クラス I MHC 抗原のみ異なる PVG.R1 ラットから PVG ラットへの組合せにおいて、移植脾の急性拒絶反応における免疫応答を移植心に対する免疫応答との比較により検討した。
- (2) 移植心は 100 日以上生着したが、移植脾は平均 21.4 ± 1.8 日で拒絶された。
- (3) 脾移植後の T 細胞主として CD4⁺ T 細胞は、心移植後ならびに移植前に比しドナー抗原に対して有意に増殖応答を示した。
- (4) 脾移植後の IL - 2 産生ヘルパー T 前駆細胞クローニングは心移植後ならびに移植前に比し有意に拡大したが、細胞傷害性 T 前駆細胞クローニングは拡大しなかつた。
- (5) 脾移植後の血清中には、ドナーのクラス I MHC 抗原に結合し細胞傷害性に働く抗体が産生されることが明らかとなった。

論文審査の結果の要旨

本研究は、心肝腎は拒絶されないが脾は拒絶されるというクラス I MHC 抗原のみが異なるラットの系を用いて、脾のみが拒絶されるレシピエントの免疫応答の特異性を細胞性ならびに液性免疫の面より検討したものである。

特に細胞性免疫応答としての IL - 2 産生ヘルパー T 前駆細胞頻度ならびに細胞傷害性 T 前駆細胞頻度はラットの系で新しく確立した手法を用いていること、さらに液性免疫応答として脾移植ラットの血清中抗体の働きを補体依存性細胞傷害活性で測定し、その抗体がドナーのクラス I MHC 抗原に向かうことをブロッキングを用いたフローサイトメトリーにて明らかにしていることが特記すべき点である。本研究は今後の脾移植における免疫寛容の誘導ならびに臨床の移植成績の向上につながる価値ある研究であり、学位に値するものと認める。